

「わたしは主である」

出エジプト記 六章二―一三節

南山教会 二〇二五年一月一六日

大塚 棕

本日の聖書箇所出エジプト記六章は、神がモーセを再び立たせる場面です。ここに至るまで、モーセの歩みは決して順調ではありませんでした。出エジプト記に関して少し振り返りましょう。

モーセはイスラエルの民の中に生まれながら、エジプト王の娘に拾われて、王宮で育ちました。生まれた時代、イスラエルの男の子はすべてナイル川に投げ込まれなければならない――そんな過酷な命令が出ていました。つまり、モーセは“奇跡的に生き残った子ども”だったのです。彼の名前「モーセ」は、「水の中から引き上げられた者」という意味です。彼自身の人生が、神の救いのしるしとして始まっていました。ところが成人したモーセは、ある日、自分の民族が奴隷として苦しめられているのを見ます。怒りのあまり、エジプト人を打ち殺してしまう――その結果、命を狙われ、王宮を追われ、荒野へ逃げ出します。彼は、逃亡者となりました。そこで四十年ものあいだ、羊飼いとして生きます。かつての「エジプトの王子」が、「名もなき羊飼い」として静かに歳を重ねていきます。しかしその荒野で、神はモーセを呼ばれます。燃える柴の中から声がしました。「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」

(出エジプト 3:10) しかしモーセは、即座に答えられませんでした。「ご覧のとおり、イス

ラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオがわたしの言うことを聞くでしょうか。」(3:22) 神の呼びかけに対して、彼は何度も何度も言い訳を繰り返しました。それでも神は、「わたしが共にいる」と言って彼を立たせました。勇気を振り絞ったモーセは、兄アロンと共にエジプトに戻り、ファラオに願い出ます。けれどもファラオは聞き入れません。モーセの思いとは裏腹にファラオはこう言いました。「この者たちは、仕事をきつくすれば、偽りの言葉に心を寄せることはなくなるだろう。」(5:6) 結果、民の苦しみはさらに激しくなり、人々は怒りの矛先をモーセに向けました。「どうか、主があなたちに現れてお裁きになるように。あなたたちのお陰で、我々はファラオとその家来たちに嫌われてしまった。」(5:21) モーセは打ちのめされ、神に訴えます。「わが主よ、あなたはなぜこの民に災いをくだされるのですか。」(5:22)

このような絶望の中で、今日の箇所——出エジプト記の章が語られます。モーセも民も、信仰のどん底にありました。もう何も聞きたくない。もう立ち上がれない。そんな中で、神はもう一度語られます。「わたしは主である。」(6:2) この一言が、絶望の中のモーセを再び立ち上がらせ、物語を再開させるのです。

私たちもどこかで経験しているのではないでしょうか。「信じたいけれど、信じる力が残っていない。」「祈っても何も変わらない。」病気が長引くとき、家族のことで悩むとき、あるいは世の中の出来事を見て心が沈むとき。信仰の言葉がむしろ遠く感じられる。出エジプト記の章のイスラエルは、まさにその状態にありました。しかし驚くのは、そんな民を前にしても、神は語ることをやめなかったということです。この神の自己宣言「わたしは主であ

る。」(6:2) は、聖書全体を貫く最も重い宣言のひとつです。ヘブライ語では「アニ・アドナイ」。神がご自身を示す言葉。神はモーセにこう語られました。「わたしはアブラハム、イサク、ヤコブの全能の神として現れたが、『主(ヤハウェ)』という名を知らせなかった。」(6:3) つまり神は、過去の信仰の先人たちと同じ神でありながら、今ここで新しいかたちでご自身を現すというのです。これまでは「約束の神」として知られていた神が、今ここで「行動する神」として歴史に介入される。これが「出エジプト」という救いの出来事の始まりです。イスラエルの民がもう信じられなくなっていたとき、神は「信じる民」ではなく、「苦しむ民」に語りかけられた。その語りかけこそ、「わたしは主である。」―あなたがどうであっても、わたしは変わらない。この言葉に、神の信実がすべて込められています。六章五節にはこうあります。「わたしはまた、エジプト人の奴隷となっているイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした。」(6:5) 「思い起こす」と訳された言葉は、ヘブライ語で“ザーカル”。単なる「思い出す」ではありません。それは「忘れていたことを思い出す」という意味ではなく、「行動を起こすために記憶を呼び覚ます」という意味です。神は、民の叫びを聞き、「契約を思い起こされた」。この「聞く」「思い起こす」「行動する」という流れが、出エジプトの神の特徴です。人間は忘れます。信仰も時に弱ります。しかし神は、忘れない。この“神の記憶”こそ、絶望の中での希望です。

神の言葉を受けたモーセは、再び立ち上がります。けれども、民は聞こうとしません。その時モーセは言います。「ご覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオがわたしの言うことを聞くでしょうか。」(6:12) これは、出エジプト記三章で神に召されたときの言い訳と同じ言葉です。モーセもまた、民と同じく“信じ

られない者”の一人でした。しかし神は、その弱さを責めませんでした。神は、人の弱さを通して働かれる方です。モーセが「できません」と言った時、神は「あなた一人ではない」と応えられた。この神の配慮は、私たちの生活にも通じます。モーセのように「語っても届かない」状況が多くあります。家庭の中で信仰を分かち合えない。社会の中で、信仰の言葉が浮いてしまう。病や孤独の中で、神の約束が遠く感じる。けれども、神の言葉は、人の反応によって消えるものではありません。神は語り続けられる方です。「神の言葉が届かない」と思える時にも、実は神が働いておられた。後になって初めてそれが見えてくることがあります。神の約束は、時間をかけて実現する。イスラエルが出エジプトに至るまでも長い歳月が必要でした。信仰とは、「待つ力」です。待ちながらも、神の語りかけを聞き続けること。

今日の箇所を中心にあるのは、神の変わらぬ自己宣言―「わたしは主である。」この言葉は、すべての不安の上に置かれる土台です。私たちが信じられなくなっても、神は信じていてくださる。私たちが祈れなくても、神は覚えていてくださる。私たちが弱くても、神は共におられる。モーセも民も、すぐには立ち上がれませんでした。でも神の語りは止まらなかった。そして神の言葉は、ついにエジプトを動かし、海を開きました。今日の私たちの教会もまた、疲れや不安を抱えながら、次の世代へ信仰をつなこうとしています。その中で神は同じように言われます。「わたしは主である。わたしはあなたを選び、導き、約束を果たす。」この言葉に立つとき、私たちは再び歩き出すことができます。たとえ声が小さくなっても、祈りが言葉にならなくても、神の約束は私たちを包んでくださるのです。お祈りいたします。